

第4回門真市学校適正配置審議会議事録

開催日時 令和元年8月21日（水） 午後2時～午後4時05分

開催場所 市役所本館2階 大会議室

出席者 横山俊祐、浦嶋敏之、西孝一郎、吉岡眞知子、松崎淳子、村上空織、大田俊二、後藤忠夫、日置芳太郎、上村梨恵、加藤諭、濱崎恵子、国吉孝、上甲尚、清水玉美

事務局 満永教育部長、中野教育部次長兼教育総務課長、三村総括参事、渡辺教育総務課参事、峯松学校教育課長、高山学校教育課参事、東谷教育総務課長補佐、宮崎教育総務課長補佐、前馬教育総務課副参事、柳瀬学校教育課長補佐、向井学校教育課長補佐、松本学校教育課副参事、永田教育総務課主任、長教育総務課主任

傍聴者 4名

議 事

○開催 事務局

定刻となりましたので、第4回門真市学校適正配置審議会を開催いたします。本日はご多忙にも関わりませず、ご出席いただきまして誠にありがとうございます。

本日は、委員16名中15名が出席されており、門真市附属機関に関する条例の施行に関する門真市教育委員会規則第5条第2項の規定により、会議が成立していることをご報告申し上げます。

次に、お手元の資料の確認をしたいと思います。

1点目 会議次第。2点目 資料1 第3回審議会の振り返りと確認について。3点目 資料2 学校施設の現状。4点目 資料3 審議会のスケジュールと進め方。5点目 資料4 学校規模の現状と推計。6点目 資料5 中学校区ごとの基本情報。となっております。すべておそろいでしょうか。それでは、おそろいですので、進めさせていただきます。

以降の進行は、会長にお願いしたいと思います。会長よろしくおねがいたします。

会長

みなさんこんにちは。今日は本当にお暑い中、お集まりいただきましてありがとうございます。審議会も4回目を迎えて、前回まででキャリア教育をこれから進めていくといったことや、つながりということを大切にしていきたい、それから小中一貫校の見学も行きて、一貫校が非常に魅力的なものであるということも出てきました。そのような中で、門真の学校をどう創っていくのかということについて、ある程度ベースになる方向性は見えてきたような気がします。

本日はこれまでの議論を踏まえつつも、この会の中心の目的でもある、学校の適正化に向けて、どのように今後進めていくのかという、少し今日は今までの学校のありようについて、門真のこれからの学校のありようについてということから、今度は実際に門真の学校をどう創っていくのか、どう再編していくのかという議論に移行していくのが今日だということで捉えていただいて、活発に議論を進めたいと思います。

まずは案件1です。門真のめざす教育の方向性と学校のあり方についてということで、これは前回の振り返りになりますので、資料を基に事務局からお願いしたいと思います。

事務局

私より前回の振り返りについてご説明させていただきます。お手元の資料1をご覧ください。2ページから説明させていただきます。先ほど会長からご案内があった通り、前回まで門真の教育の方向性と学校のあり方の視点ということで議論を進めてまいりました。第3回の前回の会議では、午前中に池田市立ほそごう学園を視察しました。午後からは第3回の審議会を行い、皆様と議論を進めてきたところでございます。

また、先生からは小中一貫教育の背景、また、基本的な考え方についてレクチャーを行っていただきました。その中で、皆様から出てきた意見をまとめたものでございます。

まず、子どもたち9学年の縦のつながりということで、義務教育学校を視察したということと、小中一貫教育の考え方を勉強したうえで、やはり9学年の子どもたちが一緒にいるという環境について、様々な意見を出していただいたところでございます。吹き出しになっているところは皆様の意見を抜粋させていただいた部分でして、下の矢印になっているところがまとめの部分でござ

います。

まとめの1番上ですが、9学年の子どもたちが一緒にいることで、下級生にとっては、上級生を見て、憧れの気持ちや将来の展望が、また、上級生にとっては下級生の子たちを見て、優しさや責任感が感じられるなど、双方にとって相乗効果があるのではないかと、という話であったかと思えます。2つ目に子どもは異学年の関わりの中でお互いに成長していくものではないか。少子化やつながりが希薄になる時代であっても、子どもたちが異年齢のつながりの中で育つことができるよう、大人がその環境を創ることも大事ではないか、といった議論もありました。3つ目といたしまして、保護者や周りの大人にとっても、縦のつながりの中で10年後の姿がイメージできるなど、9年間という長い目で子どもたちの成長を考えていくことができるのが、小中一貫教育のいいところではないか、といった内容だったかと思えます。

次に3ページに進みまして、子どもたちのつながりだけではなくて、小学校、中学校の先生をつながりというものについても色々な意見をいただいたところです。具体の意見については記載の通りでございますが、まとめのところを見ていただいて、小中の先生が子どもたちの成長過程や課題などの情報を共有して、9年間を見通した教育課程を考えることがメリットではないか。また、子どもだけではなく、先生の意識が大きく変化していて、同じ目標に向かって取り組むことができるのも小中一貫教育の可能性ではないか。ただ、学校や先生にとって、小中が一緒になるということは、時間的な制約があったりだとか、1年生から9年生まで体格も違いますので、使う物のサイズが違うといったことがあったりと、現実的な課題があることも事実である。このような課題も含めて、子どもたちの成長のために一緒に取り組むことで、より一体感が生まれ、良い学校につながるのではないかと、ということで、先生方をつながりということも小中一貫教育の大きなポイントではないかというようなお話もあったかと思えます。

次に4ページを見ていただきまして、その他ということで、いくつか出てきた意見の中で、小中一貫教育をただ導入すればいいということではなく、小中一貫教育を手段として、どういったところを活用していくのか、門真としてどうしていくのか、門真としての小中一貫教育といった視点での話もいくつか出てきたかなと思っています。

これらのことや、また、今までの議論全体のまとめといたしまして、3つ書かせていただいています。1つ目が、小中一貫校は子どもたちのつながりはもちろん、保護者や周りの大人にとっては長い目で子どもの成長を考えることができる。また小中学校の先生にとっても、つながりや一体感、意識の変化にも好影響を与えているようである。2つ目といたしまして、審議会の議論としては、小中一貫校の視点を積極的に取り入れていこうという方向で話がまとまっている、

今後、大いに可能性があるものとしてこれからの門真の学校づくりに積極的に反映していくことにしたい。ただし単に小中一貫校だからいいということではなくて、小中一貫教育を手段として、その特性をどう活用するのが大事である、門真のめざす教育の軸をもって全体で底上げにつながるように取り組むことが必要である、といった内容になるのかなと思っております。

前半、小中一貫教育の議論をしたその後、改めて門真がめざしたい教育はどういうことかということで、ご説明をさせていただきました。それが5ページの図になります。人とのつながりの中で自分の生き方を見つける門真がめざす教育というものを図に表すとこのようなイメージです、ということで説明をいたしまして、これを受けて、人とのつながりの中で子どもたちが生き方を見つける教育という中で、次のページに示している4点がポイントとなる視点ではないかということで、それを実現する学校というのはどういうものかということで、これまで議論してきた縦のつながり、横のつながり、将来の自分とのつながり、その他の視点の大きく4つにわけて整理をすることとしました。

その中で、縦のつながりについては小中一貫教育という話をしてきました。横のつながりについて、少し議論を深めましょうということで、7ページになりますが、地域と学校とのつながりについてたくさんの意見を出していただきました。大きなまとめの方向性としては、学校としては地域の方々に色々期待するところがあり、色々な場面で地域の方々の協力を得たいと思っている。地域の側からすると、学校を拠点として地域でつながりたい、学校と地域でもっと協力してできることがあるのではないかと、というような話が出てきました。その両方を合わせると、いかに地域とともに子どもを見守る学校を創っていくのか、どうマッチングしていくのか、というところが大事ではないかという内容の話になったと思っています。このようなことを踏まえまして、大きく3つにまとめさせていただきます。

繰り返しにはなりますが、1つ目は、地域には潜在的に子どもたちや学校へ協力したいという方が多くいる。いろんな分野に知識や知恵を持つ人材の宝庫である。こういった地域の人が参加しやすい仕組みを創って、うまくつないでいくことが大事ではないか。2つ目として、学校は学校の活動をサポートできる地域の方に来てほしい。地域は学校を一つの拠点としてつながりを創っていききたい。双方に具体的な思いや取組もあるので、うまく学校という場で仕組みを創ることができれば、地域と学校がつながることができるのではないかと。3つ目として、地域のつながりが希薄となっている中、子どもを真ん中にして地域と学校がもう一度関係を紡ぎ直すときではないか。子どもたちが将来を切り拓くために、地域と学校が一緒になって、「社会で人とつながる力」をつけてあげることが大切ではないか。このような内容で話をまとめていただいたものと思っています。

ここまでが大きく前回の議論の振り返りと確認ということになるんですが、8ページを見ていただきまして、前回最後の議論の部分で、先ほどの4つの視点について、ある程度議論ができてきました。改めて、この4つの方向性に対してどういう学校という表現になるのかまとめさせていただきました。

縦のつながりを創る学校というのは、義務教育学校も含めた小中一貫校の視点を積極的に取り入れて、異年齢の関係の中で子どもが育っていくような学校、ということになるのではないかと思います。横のつながりを創る学校というのは、子どもを真ん中に保護者や地域と学校がつながり、地域と共に子どもたちの学びや成長を見守ることができる学校、子どもたちが人とつながる力を身に付けることができる学校ということになります。将来の自分とのつながりを創る学校というのは、言葉としてはキャリア教育という言葉を使って説明してまいりましたが、子どもたちが将来の姿をイメージしながら、自立に向けて育っていくことができる学校ということになります。ほかに新たな学校づくりに必要な視点ということで、形式的に制度を採用するだけではなくて、門真の子どもたちにどう育ってほしいかという像をみんなで共有して、門真のめざす教育の軸を踏まえた学校づくりが大事ではないか、という大きな4つのまとめ方ができるのではないかとということで、こちらの8ページを作成いたしました。前回の振り返りと、これまでの議論のまとめということでご説明をさせていただきました。以上です。

会長

ありがとうございました。非常によくまとまっている資料だと思いますが、前回だけの議論というよりかは、それ以前の議論も含めて今までの総括ということで理解してもいいようなまとめになっています。これについてご意見はありませんか。キーワードはつながりということかなと思います。

委員

学校と地域のつながりがとても大切という話が何度も出てきていますし、前もお話ししましたが、私の子どもも学校が統合して3つの小学校区になった学校に通っていました。その学校に関わる地域の人というのは、一つの学校に対してある一定数かなと思うんですが、3つ一緒になったことで自分自身も学校とつながりを持たせてもらっている中で、協力する者同士の横のつながりもすごく増えて、学校が統合していなかったらこの方とはつながれていなかったんだなという広がり大切さをすごく実感しています。やっぱり子ども同士の横のつながり、たくさん子ども同士の付き合いがあることが大切だなと思います。それから、学校に行ったときに子どもに、「元何校区の子なん」と声をかけたこ

とがあるんです。そうすると「そんな聞き方したらあかんねんで」と子どもに注意されたことがありました。その時に学校でしっかりと指導していただいているんだなと思って、元何校区の誰々ではなくて、一人ひとりの子どもとして接して、広がっているんだなと実感して、大人として少し恥ずかしい思いをしたことがありました。子どもは色々な意見や価値観を素直に受け入れられるので、そのようなときに多くの経験と触れ合うことが大事かなというのを感じています。これから対話的な授業が重視されますよということも審議会の中で教えていただいて、そうすとなおのこと、対話の母数が広がるといいなと思っているところです。

会長

ありがとうございました。おっしゃるように、これからの教育の一つのアクティブ・ラーニングとして、主体的で対話的で深い学びというものがあり、対話というものが重視されています。いろいろな人といろいろな対話ができるということはとても重要ではないかと思います。

委員

先入観の無いうちにとということがとても大事なんじゃないと思います。

会長

ありがとうございます。その他いかがでしょうか。

委員

前回までの話の内容がよくまとまっていると思います。改めて私の方から付け加える意見というものはありません。

会長

そうですね。その他いかがでしょうか。

委員

私の意見としましては、建物を解体したりした空き地があるんですが、そのような土地を遊ばせとくのではなく、例えば学校区ごとに振り分けて活用できるような仕組みを作れば、他の校区からそこにやってくる子どももいるので、他の校区の子どもとも交流ができるのではないかと思います。門真は特に緑が少ないので、植物を育てることを通して、食べ物の大切さや生産者の思いなども含めて、学校の勉強につなげていくことができるのではないかと思います。

会長

先ほどの委員さんの話と今の委員さんの話を合わせると、今、つながりといっていることに関しては一つの学校を中心に縦横のつながりというふうに考えているものを、学校という枠を取り払って、学校間のつながり、学校単位を越えたつながりも必要なんじゃないかということが出てきたと思います。それから、必ずしも学びの場、活動の場は学校ということではなくて、学校の外も学校である、地域が学校だと考えてもいいのではないかと、その中でつながりがもっと増えてくるのではないかとというご指摘があったと思います。

委員

今会長がおっしゃった、学校間のつながりということも視野に入れておかないと、今後小中一貫校を創りましょう、めざしましょうとした時に、創った学校だけの問題か、ということになるので、その視点をしっかりと押さえておかないと、という危惧はありますね。小中一貫校になっていない学校も含めて、同じつながりが持てるようなものを創っていくことが必要ですね。

委員

私の住んでいる町内に子どものソフトボールのチームがあるんですが、人数が足りなくなって、他の小学校からメンバーに参加してもらっているという現状があります。そのメンバーで餅つきなんかも実施しています。スポーツなどを通して様々な関りが生まれれば、地域活動も活発になっていくのではないかなと思います。

会長

このつながりの中で、親同士のつながりや地域の中での人同士のつながりが大切だということは以前もおっしゃっていたと思いますが、そこらへんが少し弱いかなと思います。学校と地域がつながっていく過程の中で、地域同士もつながっていく仕組みを作っていくことも大切だと思います。それが学校の責務であるのかということもあるかとは思いますが、学校を中心に考えていくのであれば、それも十分可能であると思いますので、もう少し強調してもいいような気がします。

副会長

今の話に加えて、今は学校を中心に考えていただいているのでそれはそれでいいと思いますが、先ほどの話にもありましたが、子ども同士がいろんな子どもとつながっていくというような視点で、幸い門真には公立学校にいろんな持ち

味を持った子どもがたくさんいらっしゃいますので、子どもの視点から見たときの子ども同士の横のつながりをどう創っていくのか、どんな豊かなつながりを創っていくのかという視点もどこかに入れていただけたらありがたいなと思います。

会長

同じクラスの中でのつながりや同じ学年のつながりといった同年齢のつながりも重要ということですね。

副会長

おそらくこの点については大前提の話で、言わずもがなのことであまり出ていないのかなとは思いますが、資料を見ているとこの辺りのことが書ききれないのかなと思いました。横と縦と地域のコミュニティという形で、みんなで子どもたちをつながりの中で育てていく。このベースに「チーム学校」が底支えであるのかなと思いました。

会長

ありがとうございました。外側の議論は多くしていましたが、内側の議論についてもしっかりとやっておく必要がありますね。

委員

小学校ではもうすぐ体育祭がありますが、私の校区では小学校の体育祭が終わった1週間後に市民体育祭があつて、学校の先生も参加してくれています。ほとんどの小学校で実施されていると思いますが、やめているところも1校か2校あると聞いています。学校の体育祭で見せる笑顔もいいですが、校区の体育祭でおじいちゃんと一緒に出て見せる笑顔も素晴らしいものがあると思います。

委員

私の住んでいる校区では、20年ほど前から、小学校の運動会前に、地域と小学校とが一緒になって地域の清掃を行って、小学校のグラウンドの草抜きや側溝の砂掃除などをやっています。その中で、地域の人たちと小学生と一緒に活動することでつながりができて、その後、道で出会うとあいさつをしてくれるようになります。地域も学校のグラウンドを使うこともあるので、このような活動も大切だと思いますし、多くの学校に広がってくると面白いなと思います。

会長

ありがとうございます。他の校区でも似たようなことを実施されている現状はありますよね。

他に意見等はありませんか。この資料が、今までの議論の集大成ということになるかと思いますが。

委員

資料1の一番最後のページについて、どう読めばいいのかということですが、門真のめざす教育と学校のあり方について、ということで、つながりをメインとして柱があがったわけですが、最初に書かれているように、人とのつながりの中で自分の生き方を見つけるということがありました。つながりが手段で、教育としてのめざすものとしては、それぞれの生き方を見つけることをめざすということかなと理解しています。その点で行けば、最後のまとめ方の中に、元々めざしている教育の姿があって、そこに向けての4つの柱があるとしたほうがわかりやすいのではないかなと思いました。

会長

この点について事務局はいかがでしょうか。

事務局

この資料については、前回の振り返りと確認としておりますので、ご指摘いただいたように、これを最終の審議会のまとめというふうには考えておりませんでした。今回のテーマが学校づくりということでしたので、学校としてこれまで議論してきた内容をどう反映していくのか、どのような学校を創っていくのが門真のめざす教育の方向性と合致するのかという視点で資料作成をしましたので、学校が前面に出てきております。しかし、今、吉岡委員にご指摘いただいたように、最終的には門真のめざす教育として、子どもたちがそれぞれの生き方を見つけていくということが一番上にあって、そのための手段としての学校という形で紐づけていくという絵になると思いますので、これを最終形とするのではなく、今後まとめたものを改めて提示させていただきたいと思います。

会長

これまでの議論でいくと、自分の生き方をどうやって見つけていくのか、ということが大きな教育目標になるのかなとは思いますが。

それから、キャリア教育という言葉は使わないんですか。確認です。

事務局

この審議会でもそこについても考えていきたいと思いますので、使わないという意思表示をしてはいませんが、資料作成にあたって、キャリア教育と書くことによって、誤解を生む可能性があるという懸念もありましたので、あえて使っていないという状況です。

委員

このほうがいいと思います。

会長

他にご意見はありませんか。無ければこれまで議論されてきたことは、ここに集約化されているということで、これを基に門真のこれからの学校づくりの方向性を考えていく一つの手がかりとして活用していくということによろしいでしょうか。

委員

はい。

会長

ありがとうございました。

それでは、先ほども申し上げましたが、この審議会は学校の適正配置をどうするか、門真の学校をこれからどう創っていくかということが議論の中心になりますので、先ほどの方向性を踏まえながら、どのような学校づくりを進めていくかということに議論を移していきたいと思います。案件2にございますけれども、まずは門真の小中学校の現状について理解し、どのように学校を創っていくかということに議論を展開していきたいと思います。では、事務局から説明をお願いします。

事務局

私からは、『門真市の学校施設の現状について』ご紹介させていただきます。

お手元の資料2ページをご覧ください。こちらは門真の小中学校の位置図です。

1枚めくっていただきまして、こちらは市内の小・中学校の建築年月日でございます。まず、小学校でございます。ご覧のとおり、一番古い学校は門真小学校、大和田小学校、四宮小学校、古川橋小学校で昭和40年に建築されております。すでに54年経過しております。

続きまして、中学校ですが、一番古い学校は第二中学校となっております。昭和39年の建築ですので、55年経過しております。

5ページです。こちらは、小学校の改修工事の履歴になります。網掛け部分は大規模改造を実施した学校となります。網掛け以外につきましては、部分的に改修を行った内容でございます。

続きまして、こちらは、中学校の改修工事の履歴です。

校舎・屋内運動場の耐震化につきましては、平成24年度までに市内小中学校の耐震改修が完了しております。構造部材等の地震に対する安全対策は一定完了しているところではありますが、その一方でご覧いただきましたとおり、築40年以上経過し、老朽化した学校施設が数多くございます。

今日まで校舎・屋内運動場の耐震化や大規模改造等により、施設整備を行ってまいりましたが、現在の学習内容・学習形態に対応しにくい施設が多くございます。今後の施設整備計画につきましては、本市の子ども達にとって、より良い教育環境を実現する新たな考え方について検討する必要があると考えております。そこで、今後求められる『学校づくり』について少しご紹介させていただきます。

7ページになります。本資料は文部科学省の新たな学校施設づくりのアイデア集や、学校施設整備指針などを参考・抜粋して、これからの学校づくりについてまとめたものになります。

メインテーマとして、これからの学校施設は、『【教室だけで教える学校】から『学ぶ環境としての学校』へ』をもとに、『子どもにとって、より良い学校施設のあり方』、『地域とのつながりを大切にした学校施設のあり方』の2点が計画のポイントとなると考えております。

まず、『子どもにとって、より良い学校施設のあり方』についてであります。学校で決められた一つの行動や考え方のパターンだけではなく、子どもたちが自立的に学校生活を送られる場であるとともに、様々な活動の場面で、その時々の子どもの気持ちに答えられるような、変化のある空間が求められていると考えております。

それでは、ポイントとなる空間についてご紹介させていただきます。まず、多目的スペースでございます。計画のポイントとしましては3点ございます。

まず、『学年段階に応じたユニットづくり』として学年段階に応じた活動が行いやすいよう、ユニットを構成する空間や間仕切りのあり方を学年ごとに適切なものとしたり、教師のスペースや教材室等を設けたりすることで、学習空間を整ったものに維持することが容易になります。

次に、『普通教室と多目的スペースとの連続性』として、普通教室と多目的スペースを連続的、一体的に使い学習も想定し、各々の間の間仕切りのあり方を考えることがポイントとなります。

3つ目としまして、『各空間での音のコントロール』として、普通教室及び少人数指導のためのスペースでは、静かな学習空間も確保できるよう、周囲との区画の方法や天井、床等の材質について音の伝わり方に配慮することがポイントとなります。

左の図ですが、広島県府中市の義務教育学校府中学園の学年段階に応じたユニットづくりのイメージ図です。オープンスペースを設けて多目的な空間が設けられています。

右の写真でございますが、埼玉県戸田市立芦原小学校の中・高学年用の多目的スペースです。このような多目的スペースを設けることによって、『期待される効果』としまして、1つ目の効果は、普通教室を多目的スペースが連続することで、総合的な学習時間での調べ学習や習熟度別学習、チーム・ティーチングなど『多様な学習集団・学習形態の対応』が可能となります。

2つ目に、多目的スペースに学習のための多様な教材等を用意し、教科の進行に応じた掲示・展示を行うことにより、子どもたちに学習内容に対する興味を抱かせるなど、『学習に対する動機づけをする空間』となります。

3つ目は、スペースの一画にベンチなどを置くことで、子どもたちが自然と集まり、憩いの空間となり、そこでの幅広い交流が社会性や豊かな人間性の育成につながると考えられます。

つづきましては、『少人数指導などのための小空間』です。計画のポイントとしては、4点ございます。

1つ目としては、『普通教室からの利用のしやすさ』として、少人数指導等の利用できる小空間を普通教室に隣接させることで、授業の中でも活用しやすくなります。

2つ目に、『居場所にできる空間』としまして、子どもたちがその時々状態に応じて居場所にできる、デンのような空間とすることも考えられます。

3点目としまして、『音のコントロール』としまして、周囲と音を仕切ることが可能な空間を多目的スペースなどに設けることにより、使い勝手が良くなりますし、特別の支援を必要とする子どもがいる場合にも学習への取組みに集中や落ち着きを取り戻すための居場所にもなります。

4点目としましては、『親密さを感じられるづくり』として、広さに見合った天井高さにし、ベンチや窓に木材を利用しあたたかみのある空間とすることで、普通教室の環境とは異なる雰囲気を持たせることが可能となります。右の写真は廊下に面してデンが設けられたものとなります。真ん中の写真は、多目的スペース内に小空間を設けたものとなります。左の写真は、普通教室とは異なる雰囲気を持たせた小空間が設けられたものとなります。右の写真は、普通教室と連続した小空間が設けられているものです。このような小空間を設けることで期待

される効果としましては、教室での一斉授業の形態から、習熟度に応じた学習・グループ学習などに必要な時に、すぐに切り替えることができ、さらに、少人数がまとまりをもって体験的な学習をすることができます。

また、計画のポイントでもご説明いたしましたが、音のコントロールができる空間を設けることで、特別な支援を必要とする子どもが落ち着きを取り戻す空間をしても活用することができます。

続きまして、『きれいで明るい水回りスペース』です。右の写真は、神奈川県横須賀市立大塚台小学校の事例でございます。明るい色彩・仕上げを使用しトイレに行くことへの抵抗感が少なくなり、健康にもつながり『学校生活がより豊かに』なることが期待されます。左の写真は、神奈川県川崎市はるひ野小学校の事例でございます。トイレ内とは別に自立型の手洗いを設けることで、子どもたちの憩いの場をなりコミュニケーションのきっかけとなることが期待されます。このように、水回りのスペースをきれいにすることで、学校全体の印象が良くなり、きれいな状態を子どもたちで維持することを通じて、他の人への配慮といったマナーや清掃活動の重要性を学ぶことで、『人を思いやる気持ちを育てる』ことに繋がっていくことが期待されます。

続きまして、『地域とのつながりを大切にした学校施設のあり方』について、ご説明いたします。まず、現在の学校は子どもの教育のために聖域とう意識が高く、外部社会から閉ざされた空間とする考え方が強いですが、これからの学校は子どもの教育を学校のみで完結する考え方ではなく、『家庭や地域と一緒に子どもを育てる学校』として、家庭や地域住民とともに学校教育を展開していくという視点が重要であると考えます。それには、保護者や地域住民が気軽に学校にいくことができるようにすることが重要であることから、学校の中で、このような人たちが落ち着き、様々に活動する拠点となるスペースが必要であると考えます。左の写真は埼玉県戸田市立芦原小学校の事例でございます。ふれあいラウンジを活用して地域の方と連携したイベントなどの活用がされております。右の写真は新潟県聖龍中学校の事例です。地域のボランティア等の活動スペースとして活用されております。このように地域の方たちのための居場所を学校に設けることで、期待される効果としまして、1つ目は『地域と学校がより身近』な存在となり、学校・家庭・地域が一体となって教育活動に取組み、子どもたちを見守ることが可能となります。また、配置の工夫をすることで、地域の人たちの居場所から、防犯面においても役立つことが期待されます。

2つ目の効果としましては、地域の人たちによる読み聞かせ活動や子どもたちから地域の人たちへの歌の発表会等、子どもたちが学校という安全な場で家族や先生以外の大人たちと交流を図ることができます。以上が、今後求められる『学校づくり』についての紹介でございました。

ここからは、門真市の施設の現状についてご紹介いたします。こちらは、門真市の代表的な小中学校の平面図となります。昔ながらの片廊下型校舎に教室が並んでいる形となります。

会長

どこの学校ですか。

事務局

こちらは、門真小学校の平面図になります。

こちらは外観となります、外壁は長年の雨風により雨だれができ汚れている施設が多くあります。

こちらも外観となります。窓サッシは、改修している場所や、建築当時のままの場所が混在している状態です。

こちらはピロティの天井でございます。汚れや破損が多くあります。破損等があった場合は学校従事の校務員により出来る限りの修理を行っております。

こちらは昇降口です。木製の下足箱は経年劣化により、ささくれなどが出来やすい状態です。

こちらは廊下です。建築基準法に規定されている最小限の幅 1.8mの廊下に教室が並んで配置されております。あまりゆとりがあるようには感じられません。

こちらも廊下です。増築や設備の改修等により配管が天井に張り巡らされております。

こちらも廊下です。廊下と教室との段差を解消するために応急的に作られたスロープです。通行の際につまずきの原因になる可能性があります。

同じく廊下ですけれども、雨漏りにより天井材に水染みができています。

こちらは、廊下から職員室を撮影した写真です。廊下に対して職員室があまり解放されていない印象を受けます。以前、視察しました学校は廊下に面して職員室の窓が多く、解放的な印象を持たれたと思いますが、門真の学校の多くはこういった、少し閉鎖的な印象のつくりが多いです。

こちらは普通教室です。

こちらは図書室です。

こちらは理科室です。

こちらは家庭科室の流し台です。脚元が腐食して剥がれている状態です。

床の仕上げ材が経年劣化により、部分的に剥がれている状態です。

こちらはトイレです。水を流して清掃するため、常に湿気が多く衛生的に望ましくない状態となっております。建築当時のままのトイレは和便器が多いです。

こちらは、文部科学省からの文書でございます。今年に入り他市ではございますが、ひさしの落下や梁のモルタル材の落下事故が続いております。

本市におきましては、緊急的に専門業者による内部の梁や外壁の打診調査を実施し、モルタル等の浮きが確認できた箇所については除去をするなどし、緊急的な安全措置をおこないました。

こちらが「モルタルの浮き」をわかりやすく説明した資料になります。点線で囲んだイラストをご覧ください。躯体のコンクリートのうえに、モルタルを仕上げ材として塗っている部分が、経年劣化等によって、コンクリートとモルタルが剥離して浮いている状態です。モルタルの浮きが確認できた部分につきましては除去する場合や、こちらの写真のようにエポキシ樹脂を注入しアンカーピンというもので固定し剥落しないようにする方法があります。

こちらが、措置を行った写真です。点線で囲んだ箇所についてモルタルの浮きがありましたので、除去しました。

こちらも同じくモルタルの浮きが確認できましたので、除去をおこないましたが、鉄筋が露筋している状態であるため、放置すると鉄筋の腐食が進行するため、補修を計画しております。

同じく露筋している状態です。また、コンクリートに含まれるセメントに混在する炭酸カルシウムが表面に白く残留する現象である、白華現象が確認できません。白華現象が進行しますと、ツララ状になり鍾乳石のような状態になります。こちらの、階段の手すり部分に見える点々は、浮きが確認できましたので、エポキシ樹脂を注入しアンカーピンにて固定しております。

こちらは階段室の壁です。破線で囲んだ箇所に大きなクラックが確認できました。クラックの周囲のモルタルが広範囲にわたり浮いていたので、こちらにも、このようにエポキシ樹脂を注入しアンカーピンにて補強した状態となっております。点々の箇所がアンカーピンを挿入している箇所です。このように学校施設は経年劣化が進んでおります。

続きまして、本市の大規模改造工事実施校を紹介させていただきます。こちらは、外観です。大規模改造工事を実施する前は、先ほどの外壁等の経年劣化もありましたが大規模改造工事では、全面的に改造を行うため、解消されております。こちらは、昇降口になります。木の風合いを活かした下駄箱で、温かみのある雰囲気となっております。こちらは廊下です。全面的に改造を行い、明るくてきれいになりましたが、改修工事においては、教室などの配置まで変更することが難しい部分があり、平面計画は片廊下型のままであります。しかしながら、床材や間仕切りに木材等を使用することで、温かみのある雰囲気となっており、改修前と比べると、とても明るくてきれいな状態になりました。こちらは普通教室です。こちらは図書室です。トイレは、壁をタイルからパネルにし、床もタイルからシ

ートに変更し、従来の湿式から乾式へと改修することで、清潔で明るい印象を与えます。

続きまして、本市の新築で建設された、2中学校を統合した中学校を紹介させていただきます。こちらは外観になります。意匠にもこだわり、学校としてだけでなく、まちの雰囲気にも好影響を与えていると思います。こちらは、中学校内に設けられたウッドデッキスペースになります。こちらは、そのウッドデッキスペースを反対から撮影した写真になります。こちらは、建物のなかにある吹き抜けです。自然光が校舎内に取り込まれ、学校内が明るくなっております。また、懸垂幕等をかかげるのにととても良いという、先生からの声を聴きました。こちらは、廊下の一部にあるフリースペースです。こちらは、廊下の延長部分にある多目的スペースです。右側の窓を開ければ、屋外デッキとつながることができます。こちらは多目的ホールになります。こちらは図書室です。こちらは地域支援室になります。先ほど、『これからの学校づくり』で紹介しました、地域の方のための空間になります。主に、音楽協会や学校支援協議会などの社会教育活動に活用されております。簡単ではございますが、門真の学校の現状についての説明は以上になります。

会長

ありがとうございました。少し分かりにくかったかもしれませんが、他の自治体での、先進的な学校づくりの事例を紹介していただきました。東京武蔵野市の大野田小学校や埼玉県の芦原小学校、それから新潟県の聖龍中学校といった先進事例をご紹介いただきながら、なぜ今、門真の小中学校が変わらないといけないのか、ということをご紹介いただきました。そのうえで、大規模改造を行っている事例とか、新築の中学校ということで、少しずつ門真も変わりつつあるという状況もご紹介いただきました。この資料を見ながら、また、委員の皆さんは地元の学校をよくご存じだと思いますので、ハードを中心とした話でいいと思いますので、建物が今どれぐらい問題なのか、あるいは、どういう状況なのかということについてご意見を出していただきたいと思います。そこからスタートしていくしかないと思います。ひどい場合は学校をどうするか、ひどくなければそのまま使えば良いのですけれども。先生方いかがですか。

委員

今私は、五月田小学校に勤務しています。先ほど紹介のありました沖小学校と似ていて、きれいにしていただいた学校です。

会長

五月田小学校は大規模改造を行った学校ですか。

委員

そうです。

今の学校は、前任校の古い学校と比べると、トイレの衛生面にすごく差を感じます。脇田小学校のときに「トイレの衛生面で・・・。」ということがありまして、保健所等が入って苦慮したことがありました。トイレの手洗いと、給食に行くときの手洗いが同じでしたので、どうしても防ぎようがない部分がありました。水を流して掃除をする、ウェット式というトイレでした。今現在、本校はドライ方式ですので、それがまず違います。そして、手洗いに関しても、トイレの手洗いと給食に行くときの手洗いが完全に分かれています。それから、トイレの手洗いに関しては自動水栓です。手をかざすだけで水が出てきます。そういったところはやはり衛生管理面、給食のことに関しても、改善していかないといけないと思います。それと、第七中学校や、二島小学校もそうなのですが、トイレの水を流してもすぐに詰るのですね。特に夏ごろ、トイレに近い教室は臭くてたまらないという状況もあります。

委員

門真小学校もそうです。トイレのパーティションの下の部分がボロボロになっていました。トイレを使いたくないから、近くに住んでいる子どもは、家まで帰る子がいる。

会長

それは、トイレが学校では使えないから、わざわざうちに帰る子どもがいるのですか。

委員

そうです。

委員

今は第二中学校なのですが、先ほどのスライドに第二中学校が写っていました。この3月まで一番きれいな、はすはな中学校に3年間勤めていました。そして、この4月に一番古い第二中学校に異動になったので、正直、引継ぎの際に校長室に入ったときは少しショックを受けました。やはり、校舎の老朽化はかなり進んでいるというのは感じました。第二中学校には、かつて二回ほど勤めたことがありましたので、懐かしい学校です。今はしていませんが、床にグリーンペンキを、生徒と先生で春休みに塗っていました。同じグリーンではなくて、濃いグリーンもあれば、明るいグリーンもあって、床の色がまだらになっていまし

た。そんな学校ってなかなか無いのではないかなと思います。

会長

生徒も一緒に塗るのですか。それはいいですね。

委員

10年以上前の話です。その名残があって懐かしいと感じました。10年経ちましたが、変わっていないなと思いました。驚くのは、普通教室はアルミのサッシに変わっているのですが、あまり使わない少人数教室等の廊下側の窓は、まだ木枠です。鍵もねじ式のもので。もっと驚いたのが、西側の階段の天井を支える角材が上下にはしっているのです。何だろうと思ったのですが、支えるために応急的に処置しているということでした。今は学校が落ち着いているので問題ないですが。一番新しい学校から一番古い学校に代わり、ある意味カルチャーショックを受けまして、慣れるまで若干時間がかかりました。なんとか綺麗にしてもらえないかなと、先生たちと話していました。それと、廊下の幅が狭いです。はすはな中学校の半分ぐらいしかないと思います。

会長

先ほど紹介ありました、片廊下の最低限の幅が1.8mとなっています。

委員

本当にすごく狭いです。

この前このようなことがありました。夜の会合で体育館を使用していた団体の方が、体育館のなかで携帯電話を落として、子どもが足で蹴ってしまったのですが、床と壁の間に隙間があって、そこに携帯電話が入って取れなくなりました。そういうことがありました。

会長

ほかどうでしょうか。

委員

第二中学校の体育館は、月に3～4回、1時間半程度スポーツで使用していますが、昔は電気が真っ暗だったけど、そこは良くなった。

委員

体育館は、10数年前に一度改修をしました。

委員

大和田小学校の方が、まだましかなと思う。こういうことは、お金の掛かる仕事だから、なかなか一気にするのは難しいでしょうね。

委員

ちょっとやさっとじゃできないからね。

会長

でも、そこを何とかしていくのが課題なのですよね。

委員

とりあえずは、トイレを良くしていかないといけない。

委員

トイレを辛抱するとかは、健康に良くない。

会長

ある学校で、トイレだけ全部改修したのです。そうしたら、なにが変わったかというと、トイレットペーパーの使用量がものすごく増えました。要するに、みんなが使うようになったのですね。

委員

門真小学校では、プールを造り替えたから、そこに綺麗なトイレができた。皆そこを使っている。やはり、校舎内のトイレが問題。

委員

大和田小学校のトイレはやはり古いし汚いです。窓が一か所しかなくて、光が入ってこないのが暗いです。電気をつければ明るいでしょうけれど、子どもからすると、そこは恐怖心が出てくるのかなと思います。また、この前に教頭先生から雨漏りがすると聞きました。天井に雨のシミができていたという話を聞いていました。40年ちょっと経っている古い学校ですから、悪いところは出てくると思いますが、建て替えなのか、改修なのか、はたまた統合なのか、何らか考えて進めてかなければいけないと思います。

会長

結構、老朽化が進んでいるという感じですか。

委員

やはり古いので、親目線で気になるところはありますし、毎日通っている先生方からすると、もっと気になるところがあると思いますが、全部を改修するのはすぐにできるものでもないですし、ちょっとずつ改修してもイタチごっこになりますし、やるなら一気にする方がいいのかなと思います。ですが、なかなかそれが出来る環境でもないと思いますし、難しいのかなと思います。

委員

トイレのことであれば、私もこの資料を見てトイレの改修状況はどうなのかなど、いちばん注目していました。私は就学前教育の幼稚園・保育園の教育を研究している立場として、保育園・幼稚園の現場の先生から、小学校に行くにあたり小学校との接続などについて、いろいろとやっていますが、まず何に苦しんでやっているかという、子どもたちに和式のトイレの使い方の特訓をすることです。その話を聞いたときに思うのは、社会に出たら、駅にしてもデパートにしても洋式ですから、古い学校に対応するために、5歳の子どもが特訓させられているというのは不合理かなと思います。社会に出て使えていけるのであれば特訓する意味もあるのかなと思うのですが。それは、門真に限ったことではなくて、全国的なことですが、生活様式がこんなに変わっていて、トイレがこんなに変化しているということを、学校側が一番に目をつけて、取り入れていく必要があるのかなというのを、ずっと課題に思っていました。

会長

委員、そんな特訓をするのですか。

委員

はい、します。

会長

小学校って、和式が多いですか。

委員

古いところは和式がほとんどで、その部屋に一つぐらい洋式があります。五月田小学校は違います。改修していますので、すべてが洋式です。

委員

小学校14校のうち、10校以上は和式だけなのでしょうね。

会長

改修していない学校は、和式なのでしょうね。

委員

どこの学校も、一つぐらいは洋式がありますよ。
門真小学校は、配管の図面がないので困ったことがあった。

会長

設備の話に集中しているので、それ以外に何かあればお願いします。

委員

私は、みらい小学校とはすはな中学校でしたので、比較的綺麗な学校ですが、以前、PTAで保健会というところの会議に行ったときに、保健会に出席されていた先生が言っていたのですが、今の子どもの足腰が弱いのは、洋式のトイレばかりしているからだと言っていました。また、和式トイレはしゃがんで前屈みになるので、腹圧がかかって排便しやすくなるが、洋式は椅子なのでそのあたりが違うのだという話をされていました。その先生は、子どもたちが成長していくうえで、学校が新しくなった時に、一つでいいから和式トイレを造ってくれたら、ということを書いていました。

会長

結構ありますよね、建て替えて新しくするときでも、ある学校では絶対に和式は必要と言われることがありますよね。それは、教育的な話だったのですね。

委員

確かに、和式を小さい子が使えば周りに飛び散らして、そこから臭いが発生していくということがあったりとか、洋式であればそういうところが軽減されるのかなと思ったりするのですが、保健会の話であったり、ここで話をするなかで、総合的に考えたらなかなか難しいですね。それぞれに一長一短があると思うのですけれども、やっぱり、足腰が…ということと言われると確かに今の子は弱いのかなと思ったり、世の中の古い建物はまだ和式だったりしますし、私も子どもを幼稚園に行かせるときは、和式が多く残っているところもあるということも聞いていて、それこそ幼稚園に入る前に、和式のトイレができるようにお家で訓練してくださいみたいなことを確かに言われたなど、今思い出して聞いていたところですよ。

会長

幼稚園は和式なのですか。

委員

最近は大いぶん変わってきていますかね。

委員

砂子みなみこども園は、昨年新しい施設になってスタートしたのですが、施設をどんな風にして創るかという話し合いのときに、保育士の代表や幼稚園の先生の代表が話し合いに入って決めていく段階で、先ほど先生がおっしゃられていた、学校に行ったらトイレは全て和式なので、3・4・5歳のお部屋の一つは、和式を造ってほしいということをわざわざ要望して、実際に今一つあるのです。あとはすべて洋式なのですが、世間的にはどこに行っても様式ですし、お家でも洋式ですし、学校に和式が多いために和式を取り入れたというのはありません。

委員

私は砂子小学校なのですが、自動水栓で勝手に流れてびっくりするようなトイレです。私はこどもを南幼稚園に通わせていたので、小学校に上がる前に和式を練習させたことを思い出しました。自分自身はすごく田舎で育っているので、家族で出かけたときに、山のなかの公園のトイレ入ったら蜘蛛の巣が張っていたり、和式のトイレがあったりして、和式か洋式かというよりか、その環境にあるところで出来るようになればいいのかなと思います。洋式だから良いだとか、和式だから悪いだとかではないのではないかなと思います。いろいろな状況に対応できるようにすることが大切ではないのかなと思います。

会長

トイレの話に集中しましたが、話のスタートがトイレだったもので。でも、そういう意味で、子どもたちが長い時間生活する場なので学校って。生活の場として、きちんと豊かな生活ができるように、トイレもそうですし食事の場をどうするかとか、モノの置き方をどうするかとか、いろいろな課題があるような気がします。その極端な例としてトイレの問題がありそうなので、今後これから改修をどうしていくのかというのも、一つ大きな課題になると思います。それ以外に、今日スライドを見ていただいて、感じるがあったと思いますが、そのあたりはいかがですか。

委員

私も第二中学校なのですが、木の支え棒はずっと気になっていました。これは、天井が落ちてくるから、このようなことをしているのかなと思っていました。子どもがそこを歩いて何かあって、事故でもあったらと思うと心配になります。

会長

教育委員会に聞きましょう。その棒は何でしょうか。

事務局

先ほどからお話が出ているのは、おっしゃられている通り、補強をさせていただいております。先ほどの文部科学省の通知が出まして、点検させていただきました。現在は、応急的に補強させていただいている状態です。調査しないといけないことがありましたので、その間補強しておりましたが、調査の結果には問題がありませんでしたので、木で補強しているのを撤去し、老朽化して落ちそうな部分は除去するか補強する方向で考えている状況でございます。ですので、ずっとあの状態でおいておくことはございません。

委員

私は、人数の多い、十数クラスの小学校から、新設の小学校に移りました。建て替えとか、新しくということになれば、やはり、いろいろな心配ごととか、反対のこととか、保護者としても、十数クラスもあるところから、ここからこの地域の子どもたちだけこの小学校というように、2クラスの新しい新設校に異動しました。やはり学校がきれいだと、すごく楽しかったですし、きっと親は、友達と離れる心配をしていたと思いますが、きれいな学校に通うことの楽しさや、わくわく感などは、今でも記憶に残っています。トイレのこと一つにしても、こうした方が良いのではないかとか、いろいろな話がされていることを、きっと新しい学校を創るときに、大人の方や先生方がいっぱいしてくださったから、あのわくわく感があったのかなと感じています。

会長

やっぱりショッキングだったのは、紹介のあった学校の外観の雰囲気。あそこで子どもたちが喜んで学校に行きたいかと言ったら、決してそのような感じはないのではないかと思います。それを地域の方が一生懸命支えて、支えて、ようやく子どもたちが学校へ行っているというふうな状況なのですかね。

委員どうでしょうか。

委員

皆さんが言っていただきました。同じ意見です。

会長

ちなみに、お近くの小学校はどこでしょうか。

委員

私は、沖小学校です。大規模改造工事をしている学校です。

会長

大規模改修が進んでいるのですが、ある意味これは“新築そっくりさん”なのです。その新築状態というのは、昭和40年代の学校なのです。その学校に仮に戻ったとしても、これからの新しい教育で、アクティブ・ラーニングだの、子どもたちが主体的に学ぶということになったときに、見かけはきれいだけれど、はたして新しい教育に対応できるか。そこらへんが次の問題としてあるという気がするのですが、それを含めて少しこれから門真の学校をどう考えるかということなのですが、どうですか先生方。

委員

前半でこれからの学校づくりで、先進モデルをいっぱい見せていただいたものを、皆でもっと研究して、どのように利用できるのかということが必要かなと思います。その、先進モデルの紹介のときに、これがあつたらなと思ったのが、一長一短あるから論議はすればよいと思いますが、給食のときのランチルームというのか、異年齢が集まって一緒に食事をするということを取り組んでおられる学校もあって、さっきの縦の関係とか、先輩やお兄ちゃんが食べているのを見ながらだとか、食べる意欲を持つとか、そういった先進モデルのものもあつても良かったかなと思いました。もう一つは、オープンスペースとか多目的スペースとか、各学校が造られていて先進モデルがあつても、良いハードができて、それをどのように使うのかという教員の研修といいますか、その目的と使い方、そこがものすごくあちこちに見に行っても気になるので、施設の整備と同時に、教員側の活用ができるのかという論議も重要かなと思います。

会長

お隣の守口市が、この数年間で学校を全部建て替えていて、最初に出てきた先進的な事例と同じような学校づくりをしているので、一度観に行くと門真の学校のように片廊下に教室が同じように並んでいるような学校づくりではなくて、

もっと教室の周りにいろいろな場所があります。先ほどオープンスペースとおっしゃられていましたが、例えばグループで活動できるようなスペースがあったり、ちょっと小さな“デン”という穴ぐら空間のような場所があったり、とにかく、今までのように教室のなかで先生が前に立って、こどもたちがお利口に座って、一斉形式で授業をやるというスタイルではないものが、これからは必要になってくるのです。その時に、教室の中だけでは絶対に限界がある。教室以外にグループとか個人とか、いろいろな教材も必要になってくるのです。具体物があったり、図書があったり、パソコンがあったりというのが、身近な場所にあって、そういうのを自由に使いながら、調べ学習をしていくとか、グループでいろいろ検討していくような活動がこれから必ず出てきます。それに今の門真の学校は厳しいのではないか。対応できないのではないか、という気がしていて、それをどうするのかという問題がありそうな気がします。僕たちもそうなのですが、廊下と教室しかない学校で育ってきている人たちは、そういうイメージって湧かないのです。あれで良いと思っているのです。けれども世の中はそうではないというので、一度見学に行くというのはどうでしょうか。

委員

何人かは視察に行っていると思いますよ。教育委員会も視察に行っていますよね。

会長

ちょっと、びっくりするぐらいの学校がありますから。三層吹き抜けの大階段があって掲示されていて…。視察には行けないですか。

事務局

本審議会のスケジュールや、委員様方への一日当たりの報酬が決まっており、回数により予算も決まっております。残りの回数が4回ですが、その枠内で調整が必要なのかなと思います。

会長

門真に14校小学校があって、さっきも話がありましたが、もう仕方がない我慢でしょうか、という考え方ももちろんあるかもしれませんが、やっぱりそうではなくて、この審議会のなかで門真の学校を未来に向けて、どう創り上げていくのかということにらんだ議論をしていかなければならないと思いますが。仕方がないというあきらめではなくて、議論をしていく必要があるのではないかと思います。いかがですか。

委員

それでは少しだけ。私が、教員から校長までさせていただいた学校の話なのですが、そこは統合して出来た新しい学校で、今から20年以上前の学校です。

そこで、オープンスペースを創って教育を始めたのですが、建物ができるとそこに合った教育をしようと職員は頑張ります。その学校で、新しい教育をしてきたつもりなのですが、やっぱり今はこれまでの建築の成果が出てきて、今すごく工夫されて、守口市のさつき学園にしても、これまでの研究で良くなかった点を改善しながら創られているのです。僕のいた学校も、オープンスペースを持っていてとても良かったです。わりと隣の声は聞こえないです。それにはちょっとした工夫があって、オープンスペースの縦の長さがとても長いのです。こうしておくと、壁まで反射した音が跳ね返ってこないからいいです。

ところが、小中一貫で創った学校の方は、壁までの長さが短くて音がわりと跳ね返ってきました。仕方がないので、ドアを付けたという経緯があります。そんなふうに、それぞれの学校がうまくいったところとか、うまくいっていないところとか、十分財産として持っているのも、その辺をうまく調べていかれると、門真はとても良いものができるのではないかなと。失敗は皆わかっていますから、うまくいったところばかりではなくて、ここはこうした方がよかったなという点を、是非、見学に行くなり、資料なりで本当のところを確かめられると、絶対いいものができると思います。

副会長

いろいろなご意見が出ていましたが、先ほどおっしゃられたように、本当に中身をどんな教育にするのかと、ハードをどうするか、ということと同時に議論していった煮詰めていかないと思います。確かに、ハードに合わそうとして進歩するという効果もあるし、逆の話で、ICTなんかでよく言われるのが、電子黒板を入れたり、子どもたちがタブレットを一人ずつ持ったりしても、黒板でもできる中身のことをしているというのを時々見かけることもあります。ですから、門真の今、教育をどうしていくかという、根本のところをこの会議で積み上げてきていただいているところ。この後、その中身を具体的にどうしていくのか、という議論をしなければならない。やはり限界はあるわけで、どこで折り合いをつける必要があるわけですが、決して夢を捨てるのではなくて、その夢に一番近づく方向は何なのかということ、一般論は一般論としてあって、各委員さんは門真の地域の代表として出席していただいていますので、それに合ったかたちに、どうやって近づけていけるかというのを、煮詰めていったらいいのかなというふうに思いながら聞いておりました。

会長

そういう意味では、この会では夢を捨てずに、夢をちゃんと持ちつつ、その実現に向けて、長期的な話も出てくるかも知れませんが、短期的に何がいるか、中期的、長期的なビジョンというものを議論して、できるところからやる。そういう進め方にしていきたいと思います。

今日結論を出す必要はありませんので、世の中にはこんな学校があるが、それに対して門真の学校をくらべると、やはり問題が多いのではないかと。そういう問題に対してどう夢を実現していくか、とういうところからやっていくのかを、改めて考えていきたいと思います。それでは、この議論につきましては、このぐらいにしておきましょう。

続いて、案件3の「今後の議論について」ということで、今、門真の学校施設の問題が結構でてきたところですので、それを踏まえながら、今後どういう議論を進めていくかということについて、事務局から説明をお願いします。

事務局

それでは、案件3につきまして、資料3、資料4、資料5を用いてご説明いたします。

まず資料3をご覧ください。会議の冒頭にも会長にご説明いただきましたが、審議会の前半では、教育の方向性と門真の学校をどう創っていくかを議論しましょう、後半では、それを踏まえてどのように学校を配置していくのが、これからの学校づくりに向けて効果的なのかというような適正配置の議論を進めていきましょう、ということを進めてきました。

今回第4回ということ、太枠で囲っているところですが、本日の前半では、第3回までの振り返りとまとめについて議論いたしました。これにつきましては、先ほどもありましたとおり、これでゴールではなくて、引き続き今日の議論も含めてブラッシュアップしていきたいと思います。一方で、後半の適正配置への議論へ切り替えていくタイミングということで、これからどのように議論を進めていくかというご説明を少しさせていただいて、第5回目以降の議論の資料提供と事前説明をしたいと思います。

続きまして資料4をご覧ください。

先ほどは学校施設の現状ということで資料の説明をいたしました。次は、少し門真市全体としてそれぞれの学校規模を見ていただきたいと思います。ここに付けているものは第1回審議会の資料と近いものがあります。第1回の資料は、平成30年度の人口、児童生徒数を基礎とした資料となっております。今年、令和元年度の人口、児童生徒数が明らかになっておりますので、これを基礎として更新したものと見ていただければと思います。

めくっていただきまして、裏側と次のページが、小学校、中学校それぞれの規模別の一覧です。学校名が記載された四角枠の中にその学校の児童生徒数を入れています。下に学級数という欄がありますが、学校ごとの学級数に応じて、配置しているというように見ていただければと思います。上の欄が令和元年5月1日現在、下の欄が6年後となる令和7年5月1日時点の推計の表となっています。

見ていただきたい視点としては、学校ごとの規模の現状や学校間の差というところ、また6年後、各学校の位置が移動している、これをどう捉えるかということはあるのですが、少し規模が変わってくるというあたりを俯瞰的に見ていただければと思います。

1枚目が小学校、2枚目が中学校です。資料の中で、小規模校、適正規模校、大規模校という表記があります。これについては、次のページをめくっていただきまして、標準学級数についてです。難しい話をするつもりはないですが、国の法令規則の中で定まっているのが、学級数の標準ということで、小学校の学級数は、12学級以上18学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別な事情のあるときは、その限りでない、これは中学校でも準用するとなっています。

門真市では、第1次学校適正配置審議会が平成11年度に開催され、基本的には小・中学校とも12～18学級の標準規模校が適正であると考え、19～24学級についても許容範囲として加えて、いわゆる中規模校（12～24学級）を適正規模とすると基本的提言がなされています。ですので、現在、12～24学級を適正規模校と表記しております。

先ほどの規模の表を見ていただいても分かる通り、24学級というのは、多いなと感じるところもあろうかと思いますが、この間、子どもの数も減ってきたということで、事情がだいぶ変わってきたということになるかと思っています。

次のページ、児童生徒数の推移と小中学校の変遷です。

上半分は第1回の審議会で一度お見せしている資料です。改めて見ていただきたいのと同時に、下半分には門真の学校が、学校がそれぞれの年度にどこにあって、児童生徒の増加に伴ってどのように分離していったのかというあたりを合わせて見ていただきと思います。

上のグラフを見ると、昭和45年からの表示となっていますが、生徒児童数は昭和55年辺りまで、どんどん増えている。その後はずっと減少傾向にある。これが門真全体の児童生徒数です。下の表を見ていただきますと、右肩上がりになっているタイミングで、学校がどんどん増えていっているのを見ていただければと思います。昭和40年～昭和55年くらいまでの間、上のグラフの右肩上がりになっている間、このタイミングで、既存の学校では児童生徒数が増えすぎて入ら

ない。そのため、とにかく学校が必要ということでどんどん学校を造っていったということが、ここからも見えるのかなと思います。

もう一つは、児童生徒数のピークを超えて、現在は3分の1以下にまで減少しているところです。この先の児童数も減少ありきではなく、増やしていく必要があるというような話もちろんありますが、現状の学校配置をみると、この子どもの減少の間、学校はそれほど減っていない、もちろん時代の変化に合わせて造り替えているというようなこともありませんので、先ほど議論していただいたように昔のままの学校がずっと維持されている。これが門真の学校配置の現状となっております。

それでは次のページはA3で織り込みになっていますが、この表は小学校区、規模を全体でみていただくために地図にプロットしたものになります。門真の校区割をした地図に、校区の面積、校区の人口、校区の児童生徒数を並べて記載しております。次のページは中学校区として集約したものを載せております。学校規模を把握する客観的な資料の1つとして活用いただけたらと思います。

最後に資料5です。これにつきましては今後の議論の際の情報集として見ていただければと思っています。次回以降、具体の適正配置の議論を進めていただくこととなりますが、先ほどから議論にありますとおり、現在の学校の安全対策やトイレの課題など、短期間での対応を考えていかなければならないものや、これからの主体的で対話的、深い学びを実現していくため学校というように、抜本的に変えていく学校づくりを、どちらも並行して進めていかなければならない。その前提に立って、どう学校を配置するのが効果的なのかを考えていく必要がある。その中で、すべての学校を維持していくのが効果的なのか、今の場所を移してでも、形を変えて創りなおしていくのか、そういうところを具体的に議論していただくこととなります。

そして、小中一貫教育ということで、小学校と中学校の関係性も要素となっておりますので、現中学校区をひとつのまとまりとして議論をしていただければというのが基本的な考えであります。ですので、この資料5につきましては、中学校区ごとに、児童数や施設状況、学校の目標といったことを一枚で見ていただけるように情報を取りまとめたものになります。

この資料も、今日の議論のためにというよりも、次回以降の様々な議論のなかで、この校区はどうなっていたかなというのを確認していただくために整理をした情報とみていただければと思いますので、次回以降議論に応じて活用いただければと思います。

説明は以上です。

会長

はい、ありがとうございました。

小学校、中学校別に子どもの数の推移など非常に詳細な情報を出していただきました。皆様方地元にお住まいなので実感としてはおありだと思いますが、実際にデータで見ると、子どもの減り方というのは非常に激しいというのがご理解いただけたと思います。

そういう中で今までの議論を少し整理すると、これから門真は3つのつながりを持った学校を創っていきたいということで、ソフトだけやっていたら十分かということではなくて、建物自体もこれからいろんな学習の形、子どものつながり、地域とのつながりという点では、学校も変わっていかないといけない。

じゃあ学校をどう変えるのか、学校を現代化・未来化していくために、現在小学校は14ある、大規模改造をやった学校もあるけども先ほど言ったとおり見かけは新しいけども新しい教育に対応できているかということ決してそんなことはないという問題があります。そうすると、小学校14校、中学校6校を全部建て替えるのか、それは、実際の問題として1校30億、40億とかかるので、予算的な問題として門真がなくなっちゃうというような状況があります。

そういった中で、どのように学校の建物を現代化、未来化していくのかということ、もう一つは小中一貫校というのが教育上の効果もあるし、つながりということを考える上で非常に有効ではないか。では一貫校をどう創るのかということもあります。小学校と中学校が一緒になるわけですから、当然移動が伴います。そういう校区の再編も含めて小中一貫校づくりということも考えていかないといけない。

建物の現代化と一貫校を新しく創っていくということを、限られた予算の中で、また、子どもたちの数の推移がある中でどのように実現していくかということが、この会の最終ミッションです。それについてきちんと提言をしていくのがこの審議会の役割でございますので、これから4回ありますが、未来に向けた学校づくりを後半でやっていくという状況です。

今日は少しベースの話をしていただいて門真の学校が今どうなっているかということをご理解いただいたと思いますが、これについて何かご質問やご意見はございますでしょうか。

資料3がスケジュールです。資料4が学校規模についてです。1枚めくっていただくと令和7年、もう6年後のことですが、小さな学校がたくさん出てくる課題がありそうですし、その一方で校舎の老朽化は進んでいく。その中で新しい学校づくりが求められるがどうするか、今の校区・学校を維持するのではなく、再編しながらそこで新しい学校づくりを考えていくという方法があるのではないかと。基本的には、再編なしには未来の学校づくりをとというのは難しいのではないかと。

か。それに関連して議論していくということです。

いかがでしょうか。今日はこれについて議論というよりは、この資料についてわからないところとかご質問があれば出していただきたいと思います。

委員

次回以降でもいいかと思ったのですが、私が一番地域性というのは理解できていないので、あえて資料だけで申し上げたいのですが、前回前段としてお話ししたように、私が居たのは統合した学校でした。もともとは9つの地域だったのが5つに統合されて、最終的に5校統合をしました。9つの地域が1つになりました。そういう中で、広さが約2km²に広がりました。もともと5校ですから単純に割ると0.4km²で、小さい学区でした。結局そこが統合した結果として、地域の人材が大きく広がったんですね。前にも申し上げました学校支援ボランティアの皆さんなども200人を超えるようになりました。でも、これを5で割っていただくと40人なんですね。ということで地域の資源として大きく増えたんです。それぞれの学校5校が200人を切り始めて、地域の方々が今後の子どもたちのためには、良いのかこれだと考えられて、もちろん教育委員会の方も頑張っていたわけですが、地域主導みたいな形で統合が進んでいきました。

そんな経緯なんですけど、門真の小学校区としている後ろから2枚目の資料を見せていただいていることがあります。全く地域性を知りませんので、的外れなことを言うと大変申し訳ないですけども、やはり校区の広さとして、私達の統合した学校が0.4km²程度だったということを考えていただくと、いくつかの学校が目につきます。特に北巢本、この狭さと既に単級になっている。それから、砂子もそうですね、エリアが狭いということと単級になり始めていること。それから、今お話にも出ていた五月田、大和田もエリアが狭く、単級に近づいているということを考えると、順序性は何とも言えないですが、地域性はわからないので資料からだけですが、このあたりは手を付けていかないと将来の子どもの姿として、もっと成長できるはずのところを、先ほどの人とのつながりみたいなことから考えた時に、難しいのではないかと感じてしまいます。駄目だということではないですが、私たちの学校では、それぞれの学校でやってきた行事を、全部に広げたことで子どもたちもすごく恩恵を受けて、これまでやったことないことをやり始めたんです。5倍に広がったので、地域の人材もすごい集まったんです。その結果として、それだけではないですが、学力も全国でトップクラスまで上がっていったんですね。そういう経緯があるので、今は資料からしか言っていないので、変なことを言っているかもしれませんが、皆さんの意見を聞いてからだと言えなくなるので、あえて今日言わせてもらいました。

会長

データから見ると、資料4の学級数の見込みが小学校、中学校別にあって、令和元年から7年の6年間で、1,500人の子どもが減ってくる。令和7年というのは、実は今0歳の子どもが小学校1年生になるタイミングなのでこれは実態なんですね。決して予測値ではなくて実数で分かるんです。今校区の0歳児がそのまま小学校に入っていくことを前提とした数なので、非常に厳しい状況であるということがこれで分かると思います。そういうふうはこのデータを見ていただきながら、でも学校は良くしていきたいという、対立する話かもしれませんが、二律背反することをどう実現していくのかということを経験していくことになります。

そして先生がおっしゃったのは、その中で学校の統合は一つの考え方としてあるのではないかとということです。もちろん、統合はそんなに簡単にできるものではなくて、地域は学校に対して愛着があって、慣れ親しんだ、まさに地域の拠点となっているところもあるし、そんな簡単にいく話ではないと思いますが、そのことも踏まえながらどうするか考えていく。急に重たい話になりましたが、それが門真の未来にとって良い方向に進めていけることだと信じて議論していきたいと思います。

今日ここで統合の議論をするつもりはありません。今日は資料を頂きましたので、これを十分読み込んでいただいて、前回までの議論も踏まえながら、ここから門真の学校をどうしていくのかについて、次回以降議論を深めていきたいと思いますのでよろしくお願いします。

それでは、何か連絡があればお願いします。

事務局

次回、第5回の審議会につきましては、10月の開催を予定しておりますが、現在日程調整中です。決定次第ご連絡いたしますので、よろしくお願いします。

事務局からは、以上です。

会長

では以上ですが、今日議論しておくこと、あるいはご質問やご意見があれば出させていただきたいを思いますがいかがでしょうか。

ないようですので、未来に向けて頑張っていきたいと思いますので、今日はこれで会議を閉じたいと思います。ありがとうございました。